

‘He is in the garden.’ の構造

空 西 哲 郎

1.

1963年8月号の「英語青年」に第35回日本英文学会大会（1963年度）のシンポジウムの報告が出ているが、その中で第七部門「伝統的な文法について」を毛利可信氏が担当しておられる。問題点ごとに、提出された意見のおもなものをまとめたものであるが、第一の問題点についての報告は次のようである。

(1) **He is in the garden.** の構造をどう考えるか。

意味の重点は **in the garden** にあると考えられるから **He is a boy.** と **parallel** に考えてはどうか。

しかし **He is in the garden.** というとき **is** も「存在」の意味をあらわしているのだから、この **is** は単なる **Link-verb** ではないだろう。

この文は **There is a tree in the garden.** とくらべてみると、この2文で **in the garden** の機能はちがっている。

従来の **C** を拡大適用することにすれば、この文は ‘**S + V + C**’ ととってもよいのではないか。

毛利氏はこの問題を「英語教育」（大修館発行1963年8月号）でも取り上げて書いておられる。「新英文法セミナー（5）」の「副詞的補語をめぐって」という題である。その中から「英語青年」の報告の補足的な部分を抜き出すと次のようである。

中島文雄先生の『英文法の体系』ではこのような **in the garden** は副詞的補語（**Adverbial Complement**）〔**A.C.**〕である。

A.C. とすれば、**is** にはやはり **Predicator**（不完全ではあるが）としての機能を認め、その内容を特殊化して「庭に—いる」とすることになる。

ただ、従来の術語のワク内で考えるのだったら、**C** ということを広げて、その **A.C.** 的な機能をここに入れれば、**He is in the garden.** は ‘**S + V + C**’ 型として認めるということが考えられる。

He is. で切れる文というのが考えられないから、**in the garden** は一般の副詞的修飾語ととるのは無

理なようである。

He is. で切れる文があり得ないとは言えないと思う。

以上で **He is in the garden.** という文の構造が第35回日本英文学会大会のシンポジウムで取り上げられて、議論がどう展開したかということが大体分るのであるが、なぜ **He is in the garden.** という文の構造がこんなに問題になったのかということについては説明の要がある。

He is in the garden.（彼は庭にいる）の文型を考えて、文の要素を分析してみると、

He	is	in the garden
S	V	M
P		

がまず考えられるであろう。（**S**=Subject/**V**=[**Predicate**] Verb / **M**=Modifier / **P**=Predicate）**M**はここでは **Adverbial Modifier** であるが、このような副詞的修飾語が **is** にかかるのは、他の動詞にかかるのとは違って、少しおかしいのではないかという疑念が生じるにちがいない。たとえば

He plays in the garden.

He walks in the garden.

では **in the garden** が **plays, walks** を修飾する副詞句であることを疑う人はあるまいが、

He is in the garden.

となると、**in the garden** を副詞句とすることに大きな抵抗を感じるのである。なぜか。**in the garden** の代りに副詞の **here** を用いて

(1) **He plays here.**

(2) **He walks here.**

(3) **He is here.**

としてみると、(3)の **here** が副詞であることが、(1)(2)の **here** が副詞であることと何だか違うような気がするのと共通するものがあるからである。つまり副詞が動詞を修飾するということは、**run rapidly**（早く走る）とか **speak slowly**（ゆっくり話す）のように、「どんなに」という副詞が「…する」という動詞を修飾するこ

とであるのに、is rapidly とか is slowly とか言うこと
 はないからである。要するに is を副詞が修飾する
 いうことに違和感があるのである。しかし

He is in the garden.

He is here.

という表現は実際に存在しているのであるから、その文
 型なり要素なりを考えることは文法上必要な手続であ
 る。そこで文法家は迷うのである。

He is in the garden. の文型を今説明したようなも
 のとは違った観点から次のように分析する人がある。

He	is	in the garden
S	V	C
P		

C は Complement である。ここでは in the garden
 が Subjective Complement として用いられていると
 見るのである。補語を要する動詞は verb of incom-
 plete predication (不完全動詞) であると言われるか
 ら、この is は不完全自動詞である。その is の補語にな
 るものは名詞か形容詞であると言われるから、in the
 garden は形容詞句であると考えられる。in the gar-
 den のような prepositional phrase (前置詞句) は形
 容詞句にも副詞句にもなり得るからである。しかし the
 pond in the garden (庭〔の中〕の池) の in the
 garden は形容詞句であると言えるであろうが、He is
 in the garden. の in the garden も形容詞句である
 とは言い切れないのではないか。「庭〔の中〕にいる」と
 いう意味だからである。ところがそれに対して次のよう
 な意見を出す人がある。

He is here.

He is in the garden.

の here も in the garden も副詞 (句) であって 補語
 である。補語になるものは名詞、形容詞ばかりでなく副
 詞もなり得る、とするのである。

問題を要約すると次のようになるであろう。

- (1) in the garden は形容詞句か副詞句か。
- (2) in the garden は補語か副詞的修飾語か。
- (3) is は完全自動詞か不完全自動詞か。
- (4) He is in the garden. の文型は S+V か S+V+C
 か。

結局は補語とは何かという問題の解決が出发点となる
 であろう。

2.

英文法で complement という用語がいつから使われ
 るようになったのであろうか。Mason の English
 Grammar (初版 1858 年) には 'Since this use of the

term completion or complement of the predi-
 cate was first adopted in this work...' (p.156) と
 あるから、complement を文法用語として用いたのは
 Mason であろう。彼は verbs of incomplete predi-
 cation とともに用いられるものを the complement of
 the predicate と呼んで、これは 'to make the pred-
 ication complete' のために用いられると説明している。
 たとえば "The horse is," "The light becomes,"
 "I can," "It made the man" と言っても意味をなさ
 ない (makes no sense) から、何かほかの語 (句) 一
 substantive, adjective, verb in the infinitive—を
 動詞とともに用いて、"The horse is black." "The
 light becomes dim." "I can write." "It made
 the man mad." のようにしなければならない。イタリ
 クスの部分が補語だと言うのである。補語をとる動詞に
 は be, become, grow, seem, can, do, shall, will
 等の自動詞や、make, call のような他動詞があり、
 補語の種類には subjective complement, objective
 complement, infinitive complement があるが、
 'an adverb, or adverbial phrase, never forms the
 complement of a predicate' (p.157) と特に注意し
 ているから、Mason の補語は

- (1) 名詞 (代名詞)
- (2) 形容詞
- (3) 不定詞

になるが、副詞は補語にはならないことになる。

Mason の English Grammar に負うところが多い
 と称する Bain の A Higher English Grammar
 (初版 1863 年) にも complement という用語が出てくる
 ので、両者を比較対照する必要がある。Bain の補語は
 Mason の補語をそのまま継承しているのではなくて、
 補語になるものの種類が少し食い違っているからであ
 る。Bain の補語は Mason の補語と同じく verbs of
 incomplete predication に伴うものであって、自動
 詞には become, get, grow, fall, live, die, seem
 等があり、他動詞には can, do, shall, will, make,
 call, deem, think, consider, choose, elect, con-
 stitute, appoint 等があり、例文を見ると、その補語に
 は名詞 (代名詞)、形容詞、不定詞がなっているから、
 ここまでは Mason の補語と同じものである。ところが動
 詞 be についてはこう説明している。「特に copula と
 称される be 動詞はその固有の意味である 'existence' を
 意味しない場合には補語を必要とする」と述べて

Pitt was a statesman. (noun)

The sky is blue. (adjective)

He is here. (adverb)

That was of no consequence. (phrase)

のような例を挙げている (p. 270) ところを見ると、Bain の補語には副詞も入ることになるから、Mason の補語と食い違うことになる。表にしてみると次のようになる。

{ Mason の補語 = 名詞、形容詞、不定詞
{ Bain の補語 = 名詞、形容詞、不定詞、副詞

補語とは何かという問題の紛糾はすでにこの辺で始まっていたわけである。

He is *here*.

He is *at a distance*.

How are you?

There are twenty men *here*.

のイタリクスの部分は副詞 (句) であって be 動詞の補語であると Bain は言う (最後の例はいわゆる「there is 構文」であるが、Bain によればこの there はもとは場所の副詞であるが、この構文では副詞の力を全く失って単に 'a formal means of allowing the inversion of the sentence' になっていると説明される)。しかしこれらは Mason によればすべて副詞的修飾語だということになるであろう。

Sweet の *A New English Grammar*, Part I (1891) にも complement という用語が見られる。

He is では何の意味 (sense) も伝えないから、he is *ready*, he is *a lawyer*, he is *here* のように補語を加えなければならないと Sweet は言っているから彼の補語には副詞を含む。この点では Sweet は Bain と見解を同じくしている。

Nesfield の *English Grammar, Past and Present* (1898) では、complement は 'the additional word or words by which the predication is made complete' であって、補語には次の 7 種の異なった形態があると言う。即ち

名詞、形容詞、分詞、前置詞 + 目的語、不定詞、副詞、名詞節

である。そうして副詞を補語にすることについて次のように注している (p. 92)。

We cannot endorse the statement made in Mason's *English Grammar*: "The complement may consist of any attributive adjunct; but an adverb or adverbial phrase never forms the complement of a predicate." The examples given in the text show how very common the predicative use of adverbs is.

挙げた例の中に次のようなものがある。

My son is *well* (in good health) to-day.

The game is *over* (finished).

Nesfield は Mason の補語を批判して、副詞も補語に加えるべきだと説いているから、Bain の考えに沿っているものと言えるであろう。be 動詞について Nesfield は次のように解している。

The earth *is*. (exists)

There *are* (=exist) some who, etc.—Complete Predication.

そうすると 'there is' の構文の is は完全動詞で there は副詞的修飾語だというわけであろうが、これは Bain の解釈と対立するものである。

なお Nesfield の補語には次のようなものもあることは注目すべきである。

He put the school *into good order*.

This plot filled us all *with terror*.

They made him *laugh*.

イタリクスの部分が補語だと言う。

Onions の *An Advanced English Syntax* (1904) には complement という用語は使われていないが、subjective complement, objective complement に相当するものを predicate adjective or noun referring to the subject, predicate adjective or noun referring to the object と称しているから、Onions の補語 (に相当するもの) は副詞を含まないようである。そうして

There was peace.

という文では there was = existed を意味し、there は副詞的修飾語だとする。

Sonnenschein の *A New English Grammar* (1916) は Onions と同じように complement という用語を使わないが、その代りに predicative adjective or noun と称していて、やはり副詞を含まない。そうして

It is *here*.

の here は副詞的修飾語であると言い、

There was once a Piper.

の there も副詞であるが、ここでは特殊な用法であって、A Piper was once there. の語順の転換によって文頭に出たものであると言う。

また

He is *in good health* (=well).

の in good health は形容詞句であるが、

He is *in the room*.

の in the room は副詞句であると言っているから、

in good health は補語で、in the room は 副 詞 的 修 飾 語 であることになる。

以上説明したことから判断すると、Mason に発した complement という用語の解釈には大体二つの流れがあったと言える。即ち

- (1) Mason, Onions, Sonnenschein
- (2) Bain, Sweet, Nesfield

両方に共通する点は名詞、形容詞を補語とすることであり、異なる点は、(1)は副詞を補語としないのに、(2)は副詞を補語とすることである。なぜこのような解釈の相違が生じたのであろうか。Verbs of incomplete predication とか、to make the predication complete とか言うときの complete, incomplete の解釈の相違によるものであろう。また complete sense をなすとかなさないとか言うときの sense の解釈の相違にもよるのであろう。

(1)	He	is	ready
(2)	He	is	here
	(a)	(b)	(c)

この(1)と(2)の構造は全く同じだから(b)は不完全動詞で(c)は補語だと考えるのが Bain 流で、それに対して Mason 流の考えかたは(1)と(2)の構造は同じではなく、(2)の is は完全動詞で here は副詞的修飾語だとするのである。それならば(2)は He is. だけで文をなさない(意味をなさない)ではないかと Bain 流は反駁する。その Bain 流も 'there is' 構文では意見が分れて、この is は完全動詞になったり不完全動詞になったりする。

また次のような見解の差もある。

- (1) The sight of distress fills a benevolent mind with compassion. (Mason から)
- (2) This plot filled us all with terror. (Nesfield から)

同じ with で始まる前置詞句であるが、(1)では副詞的修飾語であるのに、(2)では補語であると意見が分れている。この場合補語というものを Bain 流に徹底すれば動詞の fills, filled の次に来る語句はすべてその補語であると言うべきで、そうすれば is の次に来るものがすべて補語だとすることと筋が一貫することになる。

Pink の *An Outline of English Grammar* (1954) は Sonnenschein や Onions の系統に属していて、補語という用語の代りに predicative noun, pronoun, adjective を用いているが、その理由を次のように説明している。「多くの文法書では complement という用語が predicative word の代りに使われているが、Joint Committee on Grammatical Terminol-

ogy は complement という用語は採りあげなかった。フランス語文法で complément と言うと、これは英文法で object と称するものを指すから不都合である。」このように、目的語を補語と言うのであれば、動詞の次に来るものはすべて補語だという解釈も起り得る。またそのような意味で補語を説明している文典も多いのである。たとえば Kittredge and Farley の *An Advanced English Grammar* (1913) は次のように説明している (p.200)。

A substantive or adjective added to the predicate verb to complete its meaning is called a complement.

Complements are of four kinds,— the direct object, the predicate objective, the predicate nominative, and the predicate adjective.

これによると補語は名詞か形容詞であって、主語と目的語の補語のほかに目的語自体も補語だということになる。しかし間接目的語は副詞的なものとして取り扱って補語にはしない。ところが Pence の *A Grammar of Present-day English* (1947) では間接目的語も補語に加えている。

Grattan and Gurrey の *Our Living Language* (1925) では Mason の用いた completion という用語を次のように解している。

The verb being, as we have just seen, normally the chief part of the predicate, the remaining part (if any) may justly be named the Completion. (p.58)

この completion を補語と解すれば最も広義の補語であって、その中にはいわゆる subjective complement, objective complement のほかに object も入り、更に adverbial modifier も含まれている。

3.

Palmer の *A Grammar of Spoken English* (初版1924年、再版1939年) の complement の考えかたは少し変っている。Kruisinga の文典に負うているという初版には complement という用語は使用されていないが、再版では complement が多く用いられている。しかしその用いかたがどんな標準によるものかよく分らない。Palmer は predicate を次の三大部類に分つ。

1. subject-complement predicate
2. verb predicate

3. object-complement predicate

それぞれ不完全自動詞、完全動詞、不完全他動詞に相当するようであるからこれは別段変ってはいないが、subject-complement になるものは名詞、形容詞、前置詞句のほかは adverb-complement (Palmer は *A Grammar of English Words* (1938) では adverbial complement と称している) があると説いて、前置詞句には

That letter is *from my brother*.

It is *near London*.

It is *in the other room*.

などの例文を示し、adverb-complement には

He is *out*.

It is *here*.

などの例が示してある。ところが

He went *away*.

I came *in*.

I live *here*.

のイタリクスの部分も adverb-complement であり、この動詞は第2の部類に属すると言うのだから、補語の限界がはっきりしなくなる。また complements of weight, cost, distance and duration という補語を設けて

It weighs *a pound*.

We walked *three miles*.

などの例文を示しているが、これも第2の部類の predicate に属すると言う。

Object-complement は初版の predicate of result に当るものであるが、

I painted the door *green*.

They elected him *president*.

のイタリクスの部分が object-complement であると言うのはいわゆる objective complement に相当するが、

I joined the two pieces *together*.

I called John *back*.

I took my hat *off*.

I put the book *on the table*.

のイタリクスの部分も object-complement であると言うのは Nesfield 流であろうか。

Hornby 氏の *A Guide to Patterns and Usage in English* (1954) は Palmer 流の補語を継承しているようであるが、subject complement の中に

1. The war is *over*.

2. She is *in good health*.

のような例を示し、これは adverbial complement であるとしているから、これは Palmer の adverb-com-

plement に相当するであろう。ところが

3. Come *in*.

4. He works *hard*.

5. There are three windows *in this room*.

6. There are many churches *there*.

7. The book was *on the desk*.

のイタリクスの部分も adverbial complement であるが、これらは動詞を修飾するもので、上の1, 2の場合と区別せよと言うから、補語と修飾語の境界が分らなくなる。そうして Hornby 氏は adverbial complement と adverbial adjunct とを混同して用いている。Hornby 氏の補語と Palmer の補語とは共通しているところもあるが、食い違っているところもあることが分る。こうなると補語の定義は混沌としてくる。(Hornby 氏は complement と predicative を混用していて統一がない。これも混乱の原因となる。)

中島文雄氏は「文法の原理」(1949)、「英語学研究室」(1956)から「英文法の体系」(1961)へと、その学説は多少変わってきているが、「英文法の体系」によれば、補語について Hornby 氏の考えかたを参考して、それを自分の体系に採り入れられたように思われる。中島氏の説は次のようになる。

Grass is *green*.

の is は意味内容のない copula であり、green は predicative である。この predicative を complement と称するのは機能名として妥当でない。predicative には名詞と形容詞になることが多いが、前者は primary predicative で「広義の同一化」を意味し、後者は secondary predicative で「記述」を意味する。その secondary predicative には次のようなものをも含む。

The rain is *over*.

He is *in perfect health*.

This letter is *for you*.

ところが氏はこうも言われる。

He is *in the garden*.

の is が copula で in the garden が predicative であるというのは誤りであろう。この is は「である」を意味する copula と機能を異にして、「にある(にいる)」を意味するものである。これを incomplete predicator と名づけよう。そうして in the garden は adverbial complement であって predicative ではない。

これで見ると中島氏の *adverbial complement* は Hornby 氏の *adverbial complement* とは少し違うようである。補語について氏は次のように説明される (p.163)。

目的語は重要な補語であるわけであるが、これに対しては *complement* といわずに *object* といってきた。そこでわれわれのいう *complement* は、目的語を除外した機能であり、動詞の機能の補足という意味で副詞的補語 (*abverbial complement*) とよばれるものである。

これによると中島氏の補語は目的語を含む広義の補語を一応是認しながらも、次に目的語を除外して *adverbial complement* を特に補語とするようであるから最も狭義の補語ということになるであろう。いわゆる *subjective complement* や *objective complement* は補語と呼ばないで *predicative* と呼ぶのである。氏の *adverbial complement* は次のようなものも含んでいる。

The package weighs a pound.

We walked three miles.

They go to school.

Come here.

He put his affairs in order.

They forced him into obedience.

Palmer, Hornby, 中島の補語には共通したものがあることは確かであるが、*adverbial complement* という用語の使用範囲については食い違いがある。

4.

米国の構造言語学では補語という用語をどうしているであろうか。Bloomfield の *Language* (1933) に出てくる *predicate complement* は従来の *subjective complement* と変りがないようであるが、補語を正面から取り扱ってはいない。Whitehall の *Structural Essentials of English* (1951) には *subjective complement*, *objective complement* も出てくるが、'The complements of a predicate restrict the range of application of the verb.' と説明し、目的語も補語の中に加えてある。従って直接目的語、間接目的語、目的補語は全部補語だということになる。Roberts 氏の *Understanding Grammar* (1954) も同じように目的語を補語に含めている。しかし *subjective complement*, *objective complement* の取り扱いについては次のような説明が注目される。

He is here. の *is* は *linking verb* と考えない

で *He exists.* の *exists* のように *predicating verb* (*complete verb* に当る) と考えるべきだ。*is* はその意味を完全にするために次に続く語が必要であって、*he is* だけでは *finished statement* にはならない。しかし他の動詞でもこれは同じことである。*He lay.* では完成しないから、*He lay quietly.* とか *He lay on the sofa.* などと言う。*He is here.* の *is* を *linking verb* と見ないで「存在」を意味する *predicating verb* と見れば、*here* は便宜的に (*conventionally*) 動詞を修飾する副詞と考えてよからう。(pp.212—213)

これで見ると、Roberts 氏は副詞は補語と認めない立場のようである。また次のようにも言っている。

Curtis was under the weather.

The explanation was over my head.

のイタリクスの前置詞句は *subjective complement* であり、

We caught him off guard.

We found Borg in a rage.

の前置詞句は *objective complement* である。しかし

Mount Lassen is on your right.

Who was in the car?

の前置詞句は形容詞的用法だと言われることがあるけれども、これらの句は *where* (どこに) ということを表現するものであるから、*is*, *was* は「存在」を意味する *predicating verb* であって、それを句が修飾していると見るのが隠当であろう。同じように

We found him in the car.

では前置詞句は *him* を修飾するのではなくて、*found* を修飾する副詞句であって、*objective complement* ではない。(pp. 224—225)

要するに副詞(句)は補語にはならないという考えのようであるから、これは Mason 流と言えよう。Roberts 氏には *Patterns of English* (1956) という著書もあるが、これにも

The girl is here.

の *is* は *non-linking verb* であると説明してあるから、*here* は副詞で *is* を修飾していることになる。このような態度は近著 *English Sentences* (1962) においても維持されている。

Hill 氏の *Introduction to Linguistic Structures* (1958) では *complement* の中に *object* を含ませていて、

I gave John a book.

の John と a book は double complement であると言、

This seems a big price.

This brings a big price.

の a big price の区別は 'semantic' なものであって、'formally indistinguishable' だと説いている。adverbial complement についても言及しているが、

John drove up.

の up は補語ではないが、

John is up.

の up は adjective または adjectival と見ての補語であると言、

John sang in the shower.

の in the shower は副詞的修飾語であるが、

John went to town.

John looked at Mary.

のイタリクスの部分は補語であると言う。しかしこうも言っている。

Adverbs, on the other hand, never function as complements, since they appear only as sentence adjuncts or as parts of the verb or complement. (p.329)

Sledd 氏の *A Short Introduction to English Grammar* (1959) も補語を説明しているが、これは目的語を含むもので、subject complement と object complement を補語としている。

以上のように構造言語学的統語論では補語という用語が用いられはするものの、その用いかたは目的語をも補語とすることを除けば大体において「保守的」であって、Mason 流の補語を踏襲しているように見えるのは意外である。

5.

C.O.D. で be の項を見ると、substantive verb, copulative verb, auxiliary verb に分けている。substantive verb としての be には

God is.

There is a God.

It is in the garden.

I am for tariff reform.

I am for London.

などの例文が示してあり、copulative verb の be には

I am a man.

I am sick.

I am of good courage.

などの例が出してある。そうすると in the garden, for tariff reform, for London は副詞句で副詞的修飾語であり、of good courage は形容詞句で補語だということになる。

P.O.D. の be の項を見ると、substantive verb, copulative verb という名称は用いられないで、'exist, occur' を意味する be の例文に

Can such things be ?

There is a meaning in it.

When is the wedding to be ?

などを示し、'remain, continue' の例に

Let it be.

を示し、be + noun, adj., adv., or phrase の構造のときは 'fall or bring oneself under such description, occupy such position, experience such condition, have such relation' を意味するとして、

I am a stranger.

I am ill.

I am of no consequence.

Don't be a fool.

Be quick.

He is at the door.

He is from Canada.

I am for York.

2 is to 3 as 4 is to 6.

などが示してある。そうしてその次に 'amount to, signify, cost' の意味に

Twice 2 is 4.

It is nothing to me.

Figs are 8d. a pound.

という例文を挙げている。これを C.O.D. の説明と比較して、be + noun, adj., adv., or phrase の構造のときの be は copulative verb であると解し、in the garden という前置詞句が C.O.D. では副詞句で副詞的修飾語であったのに、at the door という前置詞句は P.O.D. では補語になっていると見ていいのであろうか。もしそうだとしたら、この at the door は副詞句か形容詞句か。また最後の説明の 'amount to, signify, cost' を意味する例文の is, are は copulative verb ではないのか。このような疑問が残る。これはこう解釈することができであろう。C.O.D. では substantive verb, copulative verb という用語を用いて説明したが、P.O.D. ではそのような用語をやめて、

be + noun

be + adj.

be + adv.

be + phrase

という「構造の類似」に着眼して、これをまとめて記述することによって説明の簡略化をはかったのであろうと。(それが成功したかどうかは別問題である。)これはいかにも構造言語学的手法である。だから構造言語学的な長所と短所とを併せて持っていると言えるのである。このことは *The Advanced Learner's Dictionary of Current English* の be の説明についても言えることである。それによれば、まず subject と predicate を結びつけるために用いられる be として、

The earth is round.

The book is there [on the table].

This is a dictionary.

などの例文を出しているが、第二に 'become' の意味の例文に What are you going to be when you grow up? を示し、第三に 'happen, take place' の意味に When is the wedding to be? を示し、第四に 'cost' の意味に This book is five shillings. を示しているのは、「構造」と「意味」の説明の分裂と言うべきであろう。subject と predicate の結合はすべての文について言えることであって、第一だけがそうだというのは片手落ちである。

Webster's New World Dictionary (College Edition) と *American College Dictionary* とはよく似た辞典であるが、be の取り扱いは違う。前者は C.O.D. と同じように substantive verb, copulative verb を区別して、substantive verb の be の例に

Will he be here long?

Peace be with you.

が入っているが、後者は substantive と copula に分けることは前者と同じだが、

Is he here?

を copula の例文に加えているところが違っている。これは明らかに here という副詞を be の補語と解している。Bain 流であると言うべきであろう。

Webster's Third New International Dictionary (1961) は 1934 年の第 2 版とはよほど趣を異にする辞典となったが、be の項目の取り扱いはいまだあまり変わっていない。substantive verb と copulative verb を区別して、前者の例文の中に

The book is on the table.

He was at ease.

がある。*Webster's Seventh New Collegiate Dictionary* (1963) は構造言語学的な性格が更に強くなった辞典のようであるが、be の取り扱いは依然として substantive と copulative の区別を守っていて、The

book is on the table. の is を substantive verb の方に入れていると解される。

研究社の「新ポケット英和辞典」(1957) では be の説明に完全自動詞、不完全自動詞の区別を設けて、不完全自動詞は「補語として形容詞、名詞、代名詞、副詞、または前置詞の導く句を伴う」と言うが、完全自動詞、不完全自動詞のどちらにも属さないものとして

Where is Tokyo? —It is in Japan.

When is your birthday? —It is on the 5th of May.

Be here at 5.

という例文を挙げ、これは「副詞または前置詞の導く句を伴って」いると言う。ところがこの辞典の「解説」では

The garden is in front of the house.

の is は完全自動詞で、イタリクス部分は副詞的修飾語であり、

Father is out.

He is in good health.

の is は不完全自動詞で、イタリクスの部分はその補語だと言う。これで見ると、It is in Japan. の is は完全動詞か不完全動詞かについての判断にあいまいさを感じられる。

「新ポケット英和辞典」の改訂新版が 1963 年に出たが、これには完全動詞、不完全動詞のどちらにも属さないものとした旧版の例文(前掲)は不完全動詞に入れている。しかし「解説」はほとんど旧版のままであるから、It is in Japan. の is は完全動詞とも不完全動詞とも取れることになって首尾一貫しない。ただ「解説」を抜きにすれば、改訂新版の方は Bain 流になったものと言えるかもしれないが、これはウェブスター大辞典第 3 版の影響や構造言語学の影響によるものではないらしい。とするとどういうわけで be の説明がこのように変わったのであろうか。中島氏の理論を肯定したのかもしれない。*The Advanced Learner's Dictionary of Current English* の新版(1963)が出たが、be の取り扱いが旧版と違って、Full verb (substantive verb に当る) の項を新設して、その中に '3. (with adverbials): The books are on the table. He is off to London.' とある。これは明らかに Bain 流から Mason 流への改訂である。果たして何れの流が正しいのであろうか。

6.

Complement とは何か、という問題を考察するために文典や辞典の取り扱い方を調べてみたのであるが、ここで結論を出したいと思う。

補語は predicate verb の意味を完成するために必

要なものであるとすれば、動詞の次に来るすべての語句は補語であるとするのが最も合理的である。(I can write. の write は can の補語であるという考えかたは Mason, Bain に共通しているが、can write が predicate verb であると見るべきである。)目的語も副詞も名詞も形容詞もみな補語だということになって、文型は

S+V

S+V+C (+C+C...)

の二種にまとめられるであろう。実際このような考えかたをする学者もいるようである (Ralph B. Long)。そうすると

John works	hard.
John speaks	French.
John teaches	us French.
John makes	us happy.
John is	clever.
John is	here.
John is	in the garden.
(a)	

の(a)の部分は全部補語になる。補語を上のように定義する限り、こうせざるを得ないであろう。しかしこれでは(a)の部分は玉石混淆である。細分さるべきものが未分化のままである。目的語や修飾語が補語の名の下に区別なく押し込められているのである。目的語や修飾語の要素を認めないと言うのであれば問題にならないが、これらを認めないでは文型を区別する意義はほとんどなくなるであろう。complement を completer, completion の意味に解するとすれば、complement という用語が不適切だと言わざるを得ない。Mason のように complement を単に predication を完成するものと定義するだけでは足りないのである。不完全自動詞の主語と不完全他動詞の目的語とに関連してそれと意味の上でつながるものが補語であって、それらは predicate の構成要素をなすものである。主語や目的語に関連するものは当然名詞や形容詞であるはずである。補語とはそのようなものである。副詞が補語にならないということはそのためである。Bain や Nesfield は Mason の補語の定義の不備を認めて、副詞も補語になり得ると説いたが、complement が completer であるとするれば、それも一理ある。Onions や Sonnenschein は complement を用いなくて、predicate (predicative) noun or adjective referring to the subject or object と称した。名称としては長たらくて complement には及ばないが、指すものは明確になる。noun, adjective のような品詞名を文の要素名に用いるのはいけないと説く学者もある

けれども、必ずしもそうとばかりも言えまい。構造言語学でも NVN のような文の構造式を示すことがあって、noun, verb のような品詞名が文の要素名にも用いられているのである。predicate verb を predicator と称する人もあるが、predicate verb を排除する必要はないであろう。品詞名を統語論から外そうとすること自体が無理なのである。

Complement という用語に語弊があるとは言いつながら、それが簡便であるとするれば、単に completer という意味でなしに定義を変えて用いればいいであろう。

complement の意味にとらわれて、動詞の次に来るものがすべて補語であると定義することが文法的に意義がないのであれば、文法的に意義があるように補語の定義を考え直せばいいのである。

John is a boy.

John knows the boy.

の二つの文の構造を NVN として同じものだと考えるだけでは文法的に意義があるとは言えない。complement という用語を導入して object と対立させて、一方を S+V+C, 他方を S+V+O とすることによって文型を分けることが必要だと見たのが補語設定の目的だったのである。この場合注意すべきことは

S=C

S≠O

ということである。目的語は他動詞に支配されるもので、John knows the boy. の the boy は「knows の目的語である」と言うが、「主語の John の目的語である」と言うことはない。ところが補語は動詞に支配されることはないが、John is a boy. の a boy は「is の補語である」と言い、また「主語 John の補語である」とも言う。つまり補語の a boy は predicate の構成要素であって predicate に属し、is a boy となるのであるが、それと同時に主語の John に関係するものである。そういうものが補語なのである。また

John works hard.

John is honest.

の二つの文の構造を比べて、hard は works を修飾するが、honest は is を隔てて John に関係する。ここにも補語が考えられるのである。

完全、不完全ということも、ある動詞が初めから完全であるとか不完全であるとか決めることはできない。たとえば

John looked bitter.

John looked bitterly.

の二つの文は John looked までで looked の完全、不完全を決めることはできない。bitter が続くから不完全

で、**bitterly** が続くから完全だと考えるのである。同じようにして：

John is.

では意味をなさないので、この **is** は不完全で補語を要すると言うのはいけない。

John is rich.

John is here.

の二つの文では、**rich** が続けば **is** は不完全で、**here** が続けば **is** は完全だと考えるのである。**is rich** と **is here** とは構造上同じだと見るのが構造言語学の見かたかもしれないが、構造言語学では案外そのようには見ていないことは既述の通りである。構造言語学的に見ても **is rich** と **is here** とは似て非なるものなのであろう。ではどう違うのか。Bain のようにこの **is** はどちらも **copula** であると決めてしまうのは早計である。**John** と **rich** とが結びつくのと、**John** と **here** が結びつくのとは形態的にも意味的にも異なっていると見るのが文法的な見かたであろう。**is rich** の **is** が **copula** であることは明らかであるが、**is here** の **is** が **copula** であるとは容易に言いがたい。「ここにいる」のであるからである。**substantive verb** であると言うべきである。**substantive verb** は 'exist' を意味するものだけではないことは辞典を見れば分る。ところが **be** が **be** だけで **predicate** を構成することは稀れだから **be here** の **be** は **substantive verb** とは言えないと説くことがある。そんなことはない。**lie** と **stand** とかだって、これだけで **predicate** に用いることはやはり稀れだと言える。**John is.** と言うことがないからという理由で、**substantive verb** でないと言うわけにも行くまい（第4節 Roberts氏の説参照）。Harris の *Structural Linguistics* には **He's slightly liberal. They look old.** のような分布をなす動詞の文型と **He is.** のような分布をなす動詞の文型とを区別しているのである。

John is here. の **here** が **is** を修飾すると言えるかと疑問を発する人があるが、それは **John lives here.** の **here** についても言える。「どんなに」という副詞が動詞を修飾することから考えると、「どこに」という副詞が動詞を修飾するということは修飾のしかたが違うのである。

John is here. を **John is in the garden.** に変えても問題は同じである。**in the garden** は副詞句で **is** を修飾していると言えるのである。前置詞句は形容詞句にも副詞句にもなるから、**John in the garden** ならば形容詞句で、**is in the garden** ならば副詞句になる。しかし形容詞的修飾語と副詞的修飾語の修飾のしかたは

必ずしも一様ではない。**John** が「どんな」であるかであれば普通の形容詞の修飾のしかたであるが、**John in the garden** の **in the garden** は「どんな」ではなくて、「どここの」である。前置詞句が形容詞句であることと副詞句であることについてはこんな考えかたが必要であるが、また次のような考慮も必要である。*Webster's Seventh New Collegiate Dictionary* は **here** に副詞と形容詞があるとして、**this book here** の **here** は形容詞だとする。これは形容詞ではなくて形容詞的修飾語とすべきもので、品詞名と要素名の混同である。

(1) the book	here
(2) the book	on the desk
(a)	(b)

の(1)と(2)の構造は **parallel** であって、(b)は形容詞的修飾語である。しかしこれは **here** が形容詞で、**on the desk** が形容詞的性格を有するというのではない。形容詞的修飾語や形容詞句であっても形容詞的性格を有しないで、「場所の副詞」的性格を保持しているのである。

(3) The book is	here.
(4) The book is	on the desk.
(a)	(b)

これも **parallel** であるが、(1)(2)の類推から(3)(4)の(b)を形容詞的修飾語と考えてはならない。この(b)は **is** の圏内にある副詞的修飾語である。

副詞が補語になるかという問題で、**be over, be up** の **over, up** は副詞で補語だと言われるが、一体副詞ならばどうして副詞なのかという問題も考えるべきであろう。**get up** の **up** も副詞だが、どうして副詞なのかと考えてみると、**get** を修飾していると言わざるを得ないのであろうが、どのように修飾しているかときかれると答えにくいのである。しかしとにかく何等かの点で **up** は **get** を修飾していると言わなければならない。**be up, be over** の **up, over** も何等かの点で **be** を修飾していると言うほかないが、それは動詞の **be** と結んで動詞句を作っているからにはかならない。この **up, over** は主語とは関係なく **be up, be over** という **predicate** を構成しているを見るべきである。補語という要素とは切り離すべきである。

Adverbial complement という用語は Palmer から Hornby 氏に受け継がれたが、その指すものは明確性を欠く。中島氏の **adverbial complement** はこれだけを補語とする点では極めて明確であると言うべきである。しかしこれだけが補語であるとする、補語らしい補語がなくなることになる。それでよいのか。毛利氏の日本

英文学会シンポジウムの報告では「従来の **C** を拡大適用することにすれば **He is in the garden.** は ‘**S + V + C**’ ととってもよいのではないか」とあるが、中島氏の **C** は従来の **C** を拡大したものとは解されないのではあるまいか。従来の **C** は中島氏の体系では、**predicative** と改められているのであるから、従来の ‘**S + V + C**’ は ‘**S + V + P(predicative)**’ となり、**He is in the garden.** はそれとは別の文型としての ‘**S + V + A (adverbial) C (complement)**’ となるわけである。それならばこれは **C** の拡大ではなくて、**C** の縮小と言うべきであろう。補語をそう取り扱うのならばそれでもいいであろう。従

来の補語を解消してもいいのであればである。逆に従来の補語を維持するのであれば、**adverbial complement** という用語は解消すべきであろう。

第1節で提起した問題の要約に対する答は次のようになる。

- (1) **in the garden** は副詞句である。
- (2) **in the garden** は副詞的修飾語である。
- (3) **is** は完全自動詞である。
- (4) **He is in the garden.** の文型は **S + V** である。

(昭和38年8月29日稿)